

Working Paper Summary

JICA-RI Working Paper No.116

(2016年2月刊行)

Volunteer Disappointment and Outcome of Activities:

Regional Perspective of Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV)

Hisao Sekine

Research Project: [青年海外協力隊の学際的研究](#)

■付加価値

一般に青年海外協力隊員の活動による成果は見えにくいと言われる。協力隊事業が現地における隊員の様々な経験に基づく全体論的な視野で捉えられるべきものであるがゆえに、その成果は有形・無形、職場や家庭生活に関連することなど様々な要素が入り混じることになり、明示しづらくなるのである。しかしそれでも、「日本青年の成長」は協力隊発足以来折に触れて指摘される「成果」の一つとしてある。個々の隊員は2年間の任期を過ごす過程で、特定の社会的・文化的環境において自己と任国の人々との関係性を構築し、そこから自らの成長をも客体視する。本研究の意義は、協力隊を普遍的に一括して捉えるのではなく、派遣国・地域の社会および文化に関わる特定文脈で協力隊を包み込むことによって見えてくる協力隊の地域の実態を示し、それを踏まえて隊員活動の成果を捉える社会文化的視点の可能性を提示している点にある。

■リサーチ・デザイン

本論文では、派遣中および帰国後の隊員、現地 JICA 支所関係者、隊員のカウンターパート等へ半構造化インタビューと観察を中心とした質的調査手法によってデータ収集を行った。現地調査は、2006年11月にトンガおよびサモア、2011年9月にパラオ、2012年2月にミクロネシア連邦ポーンペイ島、そして2012年11月および2014年2月にソロモン諸島で実施した。帰国隊員については2013年9月に JICA 地球ひろばでインタビュー調査を行い、また同月にメールによる聞き取りも行った。考察においては、自著を含む先行研究から協力隊の本質的特徴を示す概念の抽出、太平洋島嶼地域の経済文化に関する一般的特徴および我が国の太平洋島嶼地域向け ODA の特徴を指摘した後、隊員と現地の人々との関係性の動態や日常の中から彼らが感得する現地の人々の気質や暮らしに対する内面的葛藤等について、「豊かさ」と「落胆」を分析概念にして解釈を行った。

■主な結論（政策的含意を含む）

調査を通じて、太平洋島嶼地域の隊員は、人々がサブシステム経済や伝統的相互扶助に支えられた「豊かさ」を背景に日常を送り、それゆえに職務において改善意欲を欠き、援助を待つだけに見えてしまう状態のもとにある現実を知り、落胆する傾向にあることが分かった。さらに彼らは、落胆の感情を抱きつつも日常生活における人々との交流を通じて現地の行動規範や価値観に共感を覚え、「豊かさ」の意味を問い直し始めることも明らかになった。本研究は、隊員が抱く落胆の感情と、彼らと現地の社会文化的現実との関わりの中で育まれるその後の彼らの人間的成長との連続性を検証することによって、見えにくいとされる隊員活動の質的側面を明らかにすることの可能性を示した。本研究結果は、事前研修等において、①多くの隊員が任国の現実を知ることによって落胆を経験すること、②それは各国・地域固有の社会文化的条件によって異なること、③落胆は協力隊の主要な目的の一つである日本青年の成長という成果と関係していることを明示することによって、隊員の協力活動の向上を図っていく必要性を示唆した。